

<実践報告>

「世代間交流」着物と若者

赤澤 節子 着付講師
南澤 奈緒美 研究協力員
角尾 篤子 信州大学教育学部生活科学講座

Intergenerational Exchange Project, Kimono and Young Generation

AKAZAWA Setsuko: Instructor of Kimono Dressing

MINAMISAWA Naomi: Project Collaborator

TSUNOH Atsuko: Living Science Education, Faculty of Education, Shinshu University

KIMONOS are our Japanese traditional clothes. Today Japanese women do not wear KIMONO on their daily lives, because it limits their movement, since it has long sleeves and ankle-length. They wear KIMONOS only on special occasions such as weddings and funerals. Not only young but also middle-aged people can't wear KIMONO by themselves. Formerly KIMONO and Japanese life-style were inseparably connected. So I'd like to describe KIMONO and the youth.

【キーワード】 着物 着物離れ 文化 伝統を伝える

1. はじめに

「晴れ着」という言葉がある。晴れの日に着る物すなわち晴れ着である。『晴れ』とは「晴れがましいこと・正式のこと」であるが、今日着物はまさに晴れ着であり、日常の生活からかけ離れた所にあつて、普段着としての着物は姿を消しつつあるのが現状である。街で見かける女性が着ている着物はまさしく晴れ着ばかりであり、呉服店をみると成人式・卒業式・結婚式用の晴れ着が並んでおり、普段着としての着物は隅で小さくなっている。

元来衣替えに見られるように日本人の生活と着物は密接な関係にあつた。着物をはじめ「着つけ」や「着物に関する知識」は母から娘へと伝えられてきた。祖母から母へ、母から娘に譲られた着物は箆笥の中で眠っている。今日、世代間の交流の欠如により、着物と共に伝わっていた伝統文化さえもしいに忘れられようとしている。

2. 伝統行事と着物

着物で生活していた時代には着物に関する約束事が自然に守られていた。特に子供の成

長の節目に合わせて着物が変化していく過程は興味深い。そこで子供の成長と共に変化していく着物について調べてみた。

- 「お七夜」 … 子供の出生を祝う最初の行事である。
帯祝いのとき妻の里方から贈られた白絹で仕立てた着物を着せる。
- 「お宮参り」 … これから無事に成長することを祈願し、氏子の一人になったことを地域の氏神さまに報告する行事。
- 「お食い初め」 … 子供が一生食べ物に困らないようにとの願いを込め、生後百か日目から百二十日の間にご飯を食べさせる儀式。実際にはまだご飯を食べるわけではなく、真似をするだけであるが現在ではちょうど離乳食を与え始める時期である。
色物の着物を着せる。
- 「初節句」 … 男の子は五月五日、女の子は三月三日で初めて節句を迎える日。
お宮参りの時の着物を着せる。
- 「三歳の祝い」 … 「髪置の儀」ともいい、短くしていた頭髮を初めて伸ばす儀式。
これは髪を結うための準備。
男女ともお宮参りのときに着た着物を着る。
- 「五歳の祝い」 … 「袴着の儀」で数え年五歳の男の子に初めて袴をはかせる儀式。
大人の男性と同じ、紋付の羽織・袴を着せる。
- 「七歳の祝い」 … 「帯解の儀」女の子が初めて帯を用いる祝いの儀式。
それまで着物に付いていた「付け紐」を取り、大人と同じように腰紐を使い着物を着つけ、帯を結ぶ。
- 「十三参り」 … 関西を中心に行われている行事。十三歳に子供が福德・知恵・音声を授かるために、嵯峨野法輪寺の虚空像菩薩に参詣すること。
女の子は本裁ちの振袖に肩上げをして着物を着る。

以上のように子供の成長と着物は密接な関係があったが、現在は七五三の祝いに着物を着るのみという家庭が多く、それも村や町などの一定の地域を守護する神である「氏神さま」ではなく、有名な神社仏閣に参拝するのが一般的となっている。このことを考えると、着物離れは本来あった文化のルーツも変えてしまっている。

3. 着物と若者

若者の着物離れの現象を思わぬ所で見つけた。それは家具店である。俗に婚礼家具といわれている家具のセットには、最近和筆筒が見当たらない。少し前までは嫁入り支度に着物を持参したものであるが、近年「一人で着物を着ることが出来ないので、着物はもっていかない」あるいは「どうするか考え中」という若者が増えている。考え方が合理化し、その上「ウサギ小屋」などと言われている日本の住宅事情もそれに拍車をかけているもの

と思われる。

一方で着物離れとは反対の現象があるのも興味深い。成人式を覗いてみると着物の女性ばかりでなく、羽織・袴の男性が増えている。本来男子の正装は「黒紋付の羽織」と「仙台平の袴」であるが、成人式の羽織・袴はカラフルできらびやかである。人とは変わった格好をしたい、人にみられたいという現代の若者の考えと貸衣装の多様化が成人式における男性の羽織・袴姿を増加させている。

普段着として着物は着るのが「大変、苦しい、動きにくい」と敬遠している女の子でも、夏祭りには浴衣を着たいと思っている。最近は浴衣もカラフルになり、昔ながらの藍染めの浴衣はあまり見受けられない。日中は紺地、夜は白地の浴衣を着るという昔の約束事は忘れられてしまったが、自分流に工夫して浴衣を着ている女の子を見るのは楽しい。浴衣に厚底草履(サンダル)姿でもあまり違和感を感じない。いろいろな制約に捕らわれずに気軽に着ることが出来る浴衣は「着物」より「洋服」に近い存在であるらしい。呉服店においても浴衣・帯・下駄等がセットになって一式販売され、より手軽な印象を与えている。

4 着つけ教室

日本女性の誰もが心のうちでは着物に憧れ、着たいと思っている。しかし一人で着物を着ることが出来る人は少ない。高い授業料を支払い着つけを習っても、着る機会があまりない。「洋服」と「和服」を比べると「着る」のも「しまう」のも手がかかり大変なのが「和服」である。そこでついつい多忙に紛れ和服を忘れてしまう。

平安時代に確立された日本の着物は世界に誇れる衣(い)の文化である。それが時代の移り変わりの中で衰退してしまうというのは、大変残念である。これは着物だけに限らない。日本の伝統や地域独特の文化も簡素化されたり、時代にマッチした方法に姿を変え、中には姿を消したものもある。それらを経験してきた人たちも少なくなり、また世代間交流の欠如によりその経験を言い伝える場も無いのが現状である。特に生活文化は学校において教科書を読んで終わりにするのではなく、実際に経験者を通して、お互いのコミュニケーションを図りながら体験・習得するのが理想的である。

1999年2月9日、信州大学教育学部構内の“しなのき会館”和室において、着つけ教室を開催した。「世代間交流」プロジェクトの企画・運営で「一人で浴衣を着よう」を目標に学生や教職員ら16名が参加した。始めに講師が実演し、その後一人ひとりに指導した。

初めての着付けに緊張している学生たちにとって、着丈を自分で調整しなければならぬ着物や、胴体に二巻き巻いてもまだ余っている帯は本当に厄介な物のようであった。しかし繰り返し着物を着たり、何回も帯を締めたりして少しずつ着物に馴染んでいく過程は楽しそうであった。中には授業で縫った浴衣を着た学生もいた。希望者には袴の着付けもし、記念撮影をする学生もいて終始和やかな雰囲気であった。「今年のびんずるには自分で浴衣を着て祭りに参加したい」という学生の言葉は講師にとって嬉しいものであった。最後に着物のたたみ方の練習をして着つけ教室を終了した。

若者にとって着物はまるで見知らぬ国の服であるかのように、その取り扱いが大変そうであった。説明の時“かけ襟”“おくみ”“おはしより”という言葉を使用しても理解をえられなかった。改めてそれらの言葉の説明をするというのは予想外であったが、いかに世代間の交流が希薄になっているか、感じる事が出来た。参加した学生の親世代も一人で着物を着ることが出来る人は少ないと想像できた。

普段着物に接することの無い世代(若者)と、若者と話をするチャンスの少ない世代(中高年)が、「着つけ」を通して交流できたことは意義深い。一部を除けば50代以上の方が自分の子供以外の若者と話をする事は殆ど無い。意思の疎通が出来ていないので、お互いに理解し合えず、その結果高齢者の『今の若者は』とか、若者の『時代が違うよ』の一言でお互いの中にある扉を閉めてしまう。世代交流も輪切りにしたように、子供は子供同士で遊び、親はPTA・各種サークル等で親同士の付き合いがあり、高齢者も老人会やゲートボールなど同世代間の交流が多く、異世代間・多世代間の交流は少ない。これは出会いの機会と場所がなくなっているためであると思われる。「着物という生活文化を、自分の経験を通し、実践しながら若者に伝える」。着つけを通じ世代間交流の実践が一つ出来た。

5. おわりに

着物が忘れられていくことは、同時に着物と一緒に伝えられてきた言葉も消えて行くことである。日本語独特の色の表現について考えてみる。「橙色」をオレンジ、「桃色」をピンク、「灰色」をグレーと言換えることは出来ても、「浅黄・浅葱色」「海老茶色」「利休鼠色」を想像できる日本人は少ない。日本古来の微妙な色のニュアンスを一言で言い表すのは至難の技である。広辞苑によると「浅黄・浅葱色」…薄い藍色。みずいろ。うすあお。「海老茶」…黒みをおびた赤茶色。「利休鼠色」…利休色(緑色をおびた灰色)のねずみ色(青ばんだ淡い黒色。灰色。ねずいろ)を帯びたものとある。色の説明をしようと言葉が長くなるが、それを一言で表現してしまうのが日本語の素晴らしさであり奥深さである。

一つの文化を伝えていくことは、それに伴う言葉や伝統も一緒に伝えていくことで、着物の場合さらに着物・帯の製作過程にある伝統的な染色・織りの技法も伝え残していくことになる。「着つけ教室」を一回開催しただけで、着物文化を伝えたとはいえないが、世代間交流の大前提が「出会い」である。「着つけ」を通し若者と高齢者が出会い、更に若者が着物を通し伝統文化について考えるきっかけが出来ればよいと考えている。世代間の交流がうまくいかず伝統文化の継承が危ぶまれているという話もあるが、若者も高齢者も積極的に互いの交流について考えてみる必要がある。

(2000年3月31日 受付)